

【御万人（うまんちゅ）ぴーすふるアクション】

ぴーすふるシンポジウム（カット3 招待講演全文）

では、続いて招待講演に移らせていただきます。今年は戦後75年です。あの太平洋戦争から75年が経ちました。戦後75年が経ったということはどのようなことなのでしょう。戦争、紛争と呼ばれる争い事、さらに、それを原因とする貧困や飢餓、暴力や災害など、困難な状況にある人々は数多くいます。平和を願う平和への思いを世界に広げたいと願う私たちですが、今75年というこの時間をどう捉えればいいのでしょうか。

風化させてはいけない。それをどのように語り継いでいくのか。忘れずに歴史を振り返ることができるのか。それぞれいろいろな活動を行っている方々がいらっしゃいます。どうやって戦争の体験を継承するか。時代を担う人たちにどう語り、そしてその人たちがどういう未来を築いていくのか。

そういった中で、沖縄戦に動員されたひめゆり学徒隊の生存者の方々を中心に設立されたのが、ひめゆり平和祈念資料館です。皆さんは行かれたことはありますか。実は沖縄に住んでいる沖縄県民全員が行っているかどうか。もしかすると、まだ行っていない人もいるかもしれないとあらためて思ったりします。私も久しぶりに忘れていたのではないかと、もしかしたら知らないのではないかと足を運んだのですが、新たな気づきが数多くありました。

今日は戦争体験者の記憶を次世代へ受け継ぐ資料館の館長として活躍されている方をお招きいたしました。ぴーすふるシンポジウム招待講演です。ひめゆり平和祈念資料館館長、普天間朝佳さん、お願いいたします。拍手でお迎えいたします。演題は「ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承」です。

【招待講演】

「ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承」

ひめゆり平和祈念資料館 館長 普天間 朝佳 氏

○普天間：皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、ひめゆり平和祈念資料館館長の普天間朝佳です。どうぞよろしく願いいたします。

これから30分間、私の勤めているひめゆり平和祈念資料館の次世代継承の取組についてお話させていただきます。

その前に少し沖縄戦についてもお話しさせていただきます。

皆さんご存じのように、今から75年前、沖縄はアジア太平洋戦争の末期の戦場となり、日米両軍合わせて激しい戦いが行われました。沖縄戦です。その激しい砲爆撃が90日間も

続いて、その中で日米合わせて 20 万以上の人々が亡くなりました。そのうちアメリカ兵は 1 万人余り、本土出身の日本兵は約 6 万 5000 人。そして沖縄県民は、全戦死者数の 60% に当たる 12 万人余りがなくなったのです。

その激しい戦闘の中でたくさんの人が亡くなった沖縄戦ですが、沖縄県民にこれだけの犠牲が出たのは、生活の場が戦場になったからであり、軍と民間人が入り交じっての戦いになったからでした。

私の勤めている資料館は沖縄本島の南にあります。この南部一帯は、沖縄戦のときには、たくさんの兵士や住民、そして学徒たちが追い詰められ、その末期には激しい砲爆撃の中で傷つき、命を失ったところです。戦後この辺りには、亡くなった人の遺骨や遺体があちこちに散乱して、そこに住んでいた人々は、その遺骨を片付けて弔うことから戦後生活をスタートさせたのです。

この南部一帯には、沖縄戦で亡くなった方々を弔うためにたくさんの慰霊の塔が建てられました。そのひとつが写真にあるひめゆりの塔です。ひめゆりの塔は、沖縄戦で亡くなったひめゆり学徒隊と、その教師を奉った慰霊の塔です。その左奥にあるのが、私の勤めている、ひめゆり平和祈念資料館です。

沖縄戦では、兵士だけでなく、一般の沖縄県民も、10 代の男女の生徒たちも動員されました。そのひとつが、戦後ひめゆり学徒隊と呼ばれた沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の生徒たちでした。師範学校は教員になるための学校、県立一高女は普通教育を行う中等教育の学校です。二つの学校は、キャンパスと校舎を共有する姉妹校のような併置校でした。「ひめゆり」は、この学校の愛称、ニックネームでした。

ひめゆり学徒隊は 1945 年 3 月 23 日、現在の南風原町にあった沖縄陸軍病院に動員されます。病院といっても、丘に掘られたトンネルのような壕の中につくられていました。壁も天井も土がむき出して、その中に棚のようなベッドがつくられていました。ひめゆり学徒隊の主な仕事は負傷兵の看護で、便や尿、傷の膿の悪臭の漂う壕の中で、負傷兵のうめき声や怒鳴り声が聞こえる中、ほとんど 24 時間体制の激務でした。

ひめゆり学徒隊は約 2 カ月そこで活動するんですが、首里にあった第 32 軍、日本の総司令部の近くにまでアメリカ兵が迫ってきたので、日本軍は南部に撤退することが決定します。それに伴って、ひめゆり学徒隊も南部へと撤退することになりました。

南部ではほとんど病院活動はできずに、自然壕の中に潜み、ただ自分たちのための飲み水や食料を探す日々となりました。そこにも約 3 週間後アメリカ軍が迫ってきたため、ひめゆり学徒隊に解散命令が出されて、学徒たちは米軍の包囲する戦場の中に放り出されることになりました。

解散命令後も、激しい砲爆撃の中で、たくさんの学徒が傷つき、亡くなっていきました。240 名動員されたうち、その半数以上の 136 名が命を失ったのです。

生き残った学徒たちは戦後、「生き残ってよかった」と思ったわけではありませんでした。学友とともに陸軍病院に動員され、そして一緒に活動し、一緒に砲爆撃の中を逃げてきたのに、学友は亡くなって、自分だけが生き残ってしまった。「死ぬも生きるも一緒よ」と誓い合った学友に申し訳ないという思いを抱くようになったんです。

また、学徒たちにとっては、学友の遺族に会うこともとてもつらいことでした。(自分の)娘が、戦争が終わっても帰ってこないで親御さんたちは、生き残った学徒たちのところに娘の消息を知らないかと訪ねてきます。

「解散命令後、ばらばらに逃げたので知りません」と答えると、「同じ学校なのに分からないということがあるのか」と怒り出すのです。

それから何度も情報が入ってないかと訪ねてきます。中には、学友の最後の様子を伝えに行ったのに、聞く耳を持たずに、目さえ合わせてくれなかったご遺族もいました。そのようなご遺族たちの娘を失った深い悲しみを目の当たりにして、学徒たちは強い自責の念に駆られていったのです。

生き残った学徒たちは、そういう思いから、自分の体験を戦後、長い間語ろうとはしませんでした。でも戦後40年が経ち、あの戦争のことが多くの人々の心の中から忘れ去られようとしていると思うようになって、沖縄戦のことや、ひめゆり学徒隊のことを伝えるために、ひめゆり資料館をつくることを決意したのです。

資料館の建設には多額の資金が必要でした。それで彼女たちは同窓生でお金を出し合っで、全国的な募金活動を行って資金を造成しました。また彼女たちは、自分たちが入っていた壕に40年ぶりに入って、遺骨や遺品を発掘収集したり、生存者の証言を集めたり、また、亡くなった学友のお人柄や死亡状況をまとめたりして、総合プロデューサーとともに資料館の展示づくりに努めたのです。

彼女たちはそれだけでなく、沖縄県研究者とともに当時の状況を振り返って、学ぶ機会をつくりました。実はその資料館づくりのプロセスというのは、戦後、彼女たちが初めて自分の体験や自分が受けた教育と本格的に向き合う機会になったのです。その過程の中で彼女たちは、自分たちが戦争に積極的に参加していったのは、実は当時の教育によるものであったこと、それから沖縄戦というのは、本土防衛戦の準備をするための時間稼ぎの持久作戦だったということに気付いていったのです。

資料館の開館後、資料館のテーマは、戦争と教育ということになりました。展示室の入口のパネルには、教育の恐ろしさ、言葉を変えれば、教育の大切さということです。それから、戦争体験を語り継ぎ、戦争の実相を伝えることで、再び戦争をあらしめないといったことや、世界平和を訴え続けることこそが亡くなった生徒や教師の鎮魂であるという、設立についての理念が記されました。

開館後、元ひめゆり学徒たちは、資料館の証言員となり、来館者に説明をしたり、館内外で戦争体験講話の活動を始めます。

彼女たちの語りからは戦争の実相がよく伝わってくるということで、多くの方々が耳を傾けてきました。

しかし、彼女たちは最初から自分の体験をすらすらと話していたわけではありませんでした。学友の最後の話の部分になると、胸が詰まって声が出なくなったり、涙が出てきて話が続けられなくなったりすることもありました。

しかし、来館者の方々の真剣に話を聞いてくださる姿や、「伝えてくれてありがとうございます」という言葉に励まされ、次第に伝えていくことの意義と役割を感じるようになっていったんです。

彼女たちは、そのような戦争体験を伝えるという仕事だけでなく、学芸員とともに、資料の収集、整理、保存、あるいは企画展やイベントの準備、運営、原稿執筆など、資料館のあらゆる仕事を担ってきました。資料館運営を中心になって担ってきた人たちだったんです。ひめゆり資料館は開館以来、「沖縄戦の全学徒たち展」や、「ひめゆり学徒の戦跡巡り」など、さまざまな企画展やイベントを開催し、沖縄戦とひめゆり学徒に関する多くの出版物を発刊してきました。これはちょうどいろいろ話し合っている写真ですけれども、開館 30 年で 2300 万人の入館者をお迎えしています。

開館 10 周年の 2000 年ごろになると、元ひめゆり学徒たちの年齢が 70 代になり、資料館では 2 世代への継承が課題となっていきます。彼女たちは、自分たちがいなくなっても沖縄戦やひめゆり学徒隊のことを伝え続けるためにはどうしたらいいかというのを模索し始めるんです。

そこで立ち上げたのが「次世代プロジェクト」でした。

最初、彼女たちは、体験していない人が戦争体験を伝えることはできないと考えていました。そこで自分たちの証言を映像に撮って、展示室で流そうということになったんです。

でも、その後、証言映像だけでなく、展示も戦争体験のない世代にも伝わるような内容に変えていくべきではないかという意見が出て、開館 15 周年の 2004 年に展示リニューアルをすることになりました。

そのときのテーマは、「体験者が説明しなくても分かる展示」でした。

展示方針は、戦後世代にも易しく語りかける解説と、視覚に訴えるということでした。展示リニューアル後の展示を熱心にご覧になる参観者の様子を見て、館としてはリニューアルの成功を実感したのですけれども、その後、やはりこれまで証言員たちが行ってきた展示室での説明や講話活動ということも継承していく必要があるのではないかということになって、彼女たちの仕事を受け継ぐ次世代の継承者を育成することになりました。

2005 年に、証言員の仕事を受け継ぐ職員が説明員として採用されました。説明員たちは最初、証言員の展示室で説明する様子を見たり、ホールで戦争体験講話を聞くというような、証言員たちの仕事を学ぶことから始めました。

そこで説明員が気付いていったのは、証言員たち、体験者たちは、来館者に自分の体験ばかりを話していると思われがちだが、実は展示室では、例えば壕の大きさだとか、中の様子、沖縄戦の状況などを説明している部分もかなり多いということに気付いたんです。そういうことは体験していない自分たちにもできる役割だと気付くんですね。

それから、もうひとつ気付いていったのが、体験しているからといって、やすやすと伝えられるわけではないということでした。体験者である証言員たちも、伝えるために悩んで、工夫しているということに気付いていったんです。

そして、その気づきは自分たち非体験者が伝えていくときにも大きな示唆となるものであり、また、励みとなるものでした。

私たちは、ひめゆりの方々から戦跡巡りなどを担当して、戦争体験を継承していきました。でも、継承はそういった特別の場だけでなく、資料館の仕事を一緒にしていく中で、あるいは、こういう休憩時間を共に過ごす中でも日常的に行われていきました。また、継承というのは、体験者から非体験者への一方通行的なものではなく、相互交流的なものでした。

例えば、展示のテキストを一緒につくる中で、どのようにしたら伝わるのかを共に模索したり、沖縄戦とはいったい何だったのかということ、沖縄戦認識を共に深め合ってきたんです。

そういう継承の過程で私たちが気付いていったのは、体験者が自分たちのつらかったこと、大変だったことを講演の中で語ろうとしてこなかったことでした。

先ほどもお話ししましたように、体験者は、友達は亡くなったのに自分は生き残ってしまったとか、遺族に申し訳ないという思いを抱え続けていたんですけれども、講演の中ではそういうことを語ってはこなかったんです。でも、私たちはそういうことを伝えることも大切なことだと思って、今は伝えるようにしています。

彼女たちの仕事の中で重要だったのが、展示室での説明とともに、戦争体験講話でした。彼女たちは開館以来かなりの数の講話を実施してきており、1年間で千何百回というような講話を行っていました。しかし彼女たちの年齢が80代後半となり、予約を受けての講話が難しくなったため、その仕事を私たち職員が引き継ぐことになりました。戦後70年目の節目に当たる2015年、次世代の平和講話としてスタートさせました。

そして、先ほど司会の方からもお話があったように、2018年、元ひめゆり学徒の島袋淑子館長が退任し、代わりに非体験者である私が館長に就任しました。

この館長の体験者から非体験者への交代に象徴されるように、今ひめゆり資料館では次世代への継承が本格的に進められています。

私たちは彼女たちが進めてきた活動をしっかりと継承する一方で、新しい取り組みもスタートさせています。例えば、座学やガイドツアーを通して、バスガイドや戦跡ガイド、教員の方々に沖縄戦やひめゆり学徒隊の体験を知ってもらおうという講習会を12年前から実施しています。

「メモリーウォーク」というのは、若い人に沖縄戦のモニュメントを学んでもらい、それを伝える映像を制作してもらい、発信してもらおうという、ワークショップ型平和学習です。オランダのアンネ・フランク・ハウスの教育プログラムで、同ハウスとの交流がきっかけとなって取り組みを始めました。

「“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」は、今の若い人たちが映像に強い興味を持ち、身近であるという状況を踏まえて企画したもので、自作の映像を応募してもらおうことで、戦争と教育について考えもらおうという趣旨です。

昨年の大賞に輝いたのは、2月にこのシンポジウムに参加していた石川勇人君でした。タイトルは『おばあのかいこ』でした。

それから私たちは、昨年から沖縄戦ひめゆり学徒の歴史を海外に伝える展示プロジェクトを立ち上げて、最初の会場をハワイに選び、その準備もしています。

来年、2021年4月、私たちは展示リニューアルを予定しています。テーマは「戦争からさらに遠くなった世代」。

今資料館にご来館される若い人たちは、戦争体験のない、戦争からさらに遠くなっている世代となっています。そのような世代には今の展示では伝わらないのではないかと、そのような世代にも伝わるような展示に変えていく必要があるのではないかとということで、展示リニューアルをすることになりました。

リニューアルに先立って、中高生をはじめいろんな方々に意見や要望を聞く機会を持ちました。それも踏まえて今度のリニューアルでは、絵やイラストを多く用いようと考えています。生き生きとした学校の様子や戦場のリアルな様子は、写真も残っていませんし、言葉で表現することも難しい。絵やイラストならそれが可能なのではないかと考え、チャレンジすることにしました。

また写真も、笑顔の楽しそうな写真にできるだけ選び直しています。そうすることで、当時の生徒たちも今の中高校生たちと同じように学校生活を楽しんでいたことが伝わるし、戦争体験を自分たちと同じ、変わらない人たちが体験したことなんだということを実感してもらえるのではないかと考えたんです。そして、情報量が多いとなかなか若い人は受け止めにくいと考えて、若い人たちが理解しやすいように項目を減らして、難しい言葉を避けて、かみ砕いた表現になるようにも心掛けています。

最後に、今回新たに「ひめゆりの戦後」という展示を追加する予定です。先ほども話したように、ひめゆり学徒が戦後どのような思いで生きてきたのか、なぜ資料館をつくったのか、開館後どのような活動をしてきたのかを伝えることも非常に重要だと考えているからです。

作業の中で、私たちは体験者の方たち、元ひめゆり学徒の人たちに事実確認をしたり、私たちが表現していることで間違いはないかということを確認してもらったりしているんですけど、リニューアルもまた私たちにとっては大切な次世代継承の機会であると思っています。

私はひめゆり資料館が開館した年に採用され、以来 31 年間、資料館で働いてきました。職員の中では一番の古株です。でも、平和のために尽くしたいという大きな志を抱いて資料館に入ったわけではありませんでした。資料館で元ひめゆり学徒の方たちと一緒に仕事をする中で、彼女たちから戦争体験を聞き取り、そして、戦争は絶対に起こしてはならないという彼女たちの強い思いを受け取って、資料館での歳月を重ねるうちに、次第に平和への思いを培ってきたんです。

先ほどもお話ししましたとおり、2018 年、2 年前に私は島袋淑子元館長に代わって、館長に就任しました。マスコミでも大きく取り上げられましたけれども、実はとてもびびっていたんです。

体験者である（島袋）館長の存在はとても大きくて、私に務まるだろうか。

でも、90 歳を超えた島袋館長に、これ以上無理をお願いするわけにもいかず、また、島袋館長の「普天間さんたち職員にあとは安心して任せられます」という言葉を聞いたとき、30 年間も彼女たちと一緒に仕事をしてきて、彼女たちから体験や思いを受け取ってきた自分が、ひるんでいてどうする、自分がやらないでどうするというように、自分を奮い立たせることにしたんです。

それに、資料館には自分一人ではなく、彼女たちが育ててきた後継者が何名もいるではないかということも考えました。

今年に入って新型コロナウイルスの感染が拡大し、資料館は開館以来、最大の危機に直面しています。72 日間休館し、開館後も入館者は 90%も減少しています。入館者の減少は入館料で運営している民間の私たち資料館にとっては、とても大きな打撃です。新型コロナウイルスの終息はなかなかめどが立たず、厳しい状況はこれからも続いていくと思うんですが、私たち職員は、ひめゆりの方々がつくって運営してきた資料館を次の世代に引き継ぐために、これからも一步一步進んでいきたいと考えています。

すみません。ちょっと早口になってしまいましたが、これで終わります。ありがとうございました。

○司会：どうもありがとうございました。戦後生まれの館長が誕生し、そして今奮闘していらっしゃるお話、またディスカッションの中でもご意見、お言葉をいただきたいと思えます。ひめゆり平和祈念資料館館長、普天間朝佳さん、ありがとうございました。拍手をお送りいたします。どうもありがとうございました。

さて、それではこれより、およそ 10 分間の休憩の時間を挟みたいと思います。第 2 部パネルディスカッションは 15 時 30 分から始めさせていただきたいと思います。およそ 10 分

間の休憩です。休憩の間にステージ上は、ディスカッションの用意を整えるために場面転換を行います。オンライン中継の皆さん、画面がいったん変わります。少々お待ちいただきたいと思います。

なお、お手洗いは6階ロビーフロアです。階段での移動となりますので、足元に気を付けてどうぞ移動ください。およそ10分間の休憩です。

(終了)